

紳士同盟



小林信彦



紳士同盟

定価 七五〇円

発行 昭和五十五年三月十五日

五刷 昭和五十五年六月五日

著者 小林信彦 (こばやしのぶひこ)

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

182 東京都新宿区矢来町七一 振替東京四一八〇八
電話 業務部 03(368)5111 編集部(368)5411

印刷所 二光印刷株式会社

製本所 株式会社大進堂

©1980 Nobuhiko Kobayashi, Printed in Japan
乱丁・落丁本は、御面倒ですが本社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

プロローグ	一九四七年渋谷	5
第一章	春の突風	12
第二章	仕事を探せ	33
第三章	紳士と淑女	54
第四章	あの手この手	68
第五章	コン・ゲーム道	89
第六章	間奏曲	117
第七章	虚実皮膜	131
第八章	メイ・ストーム	159
第九章	夢の街	187
エピローグ	スペインの城	215

装 装
画 幀
河 平
村 野
要 甲
助 賀

紳士同盟

プロローグ 一九四七年渋谷

もし、若い読者が、時間の裂け目に落ちて、一九四七年（昭和二十二年）の東京のどこかに、急にあらわれたとしたら、そこが地球上のどこであるのか、見当がつけにくいにちがいない。

一九四七年の早春、といえば、敗戦の夏から一年半後である。官公庁職員の賃上げ要求がこじれて、日本最初の、大ゼネストが、二月一日に予定されていた。

だが、一月三十一日の午後、GHQは、マッカーサー元帥の名の下に、ゼネストを禁じた。ききとりにくい国民型ラジオが、それを日本中に報じた。

この年の一月には、当時の日本人にとって驚くべきことが、もうひとつ、起っている。一月十五日、新宿帝都座五階で、日本最初のヌード・ショウが上演されたのである。

まず、帝都座五階劇場について、説明の必要があるだ

ろう。

帝都座、といってわからぬ向きも、のちの新宿日活といえ、ああ、と思ひ出されるであろうか。伊勢丹の前にあったこの建物は、数年まえにとりこわされ、現在は丸井新宿店本館が建っている。

当時の名は帝都座——その五階に小劇場ができ、柿板落し公演として「ヴィナスの誕生」が上演されたのである。

作者は、いちおうヌード・ショウと書いたが、それが正確な意味でヌード・ショウと呼べるかどうか、自分の目で観ていないので判定はできない。

踊り子の名前は、わかっている。満十九歳だった甲斐美春で、えらび出したのは故秦豊吉氏だったそうである。「ヴィナスの誕生」のアイデアも、同氏の案、ということになっている。

当時は、ヌード・ショウなどという言葉は使われていなかった。

その名も、奥床しく、「額縁^{がくま}ショウ」。当時の雑誌記事でみると、

——カーテンが左右に割れると、美しい額縁の中に、乳当ても何もなしに、ふくよかな桃色に弾む胸部を惜しげもなく露出させてポーズをとる美女ひとり、

と思う間もなく静止の状態のまま静かにカーテンがしまるといふ、ほんのアレアレといっている間のものであったが、従来の我が国におけるレビューの常識から考えても、観客を眩^{くら}若^{じやく}たらしめるに十分であり、話題の的となったのも当然の理であろう。……

幕があいて、しまるまでが十五秒だった——そうである。残りの時間は、ふつうのレビューが上演されていたのだろう。

新宿といえば、戦後の東京で最初に露店ができたのも、ここである。

昭和二十年八月十五日が敗戦、わずか五日後の二十日に、葦簀^{あしすい}張りの尾津マーケット（正式には新宿マーケット）が開店している。関東尾津組の尾津喜之助親分が中心になって、キャッチ・フレーズは「光は新宿より」であった。

さて——

昭和二十二年二月の東京の街の表情はどうであったらうか。

焼跡はいたるところに残っていた。

というよりも、焼跡のところどころにマーケットやバラックの民家があった、という方が正確であろう。

新宿では、尾津、安田、和田の三つの組の新興マーケットと、戦前からの老舗である高野、中村屋が土地問題で争っていた。

新橋では、関東松田組が一千万円かけて作った駅前マーケットが火事で燃えている。（つとめ人の平均月収が九百円ぐらいのときの一千万円である。）

三月に入ると、尾津組組長は土地不法占拠で書類送検される。

また、闇物資の取締りが強化され、闇屋の一家四人が心中した（！）のも三月だ。

都内の米の運配は十七日で、全都民が十七日間、メシを食わずにはいられないから、当然、闇米^{ぐみ}が流入する。警察はそれを阻止しようとする。闇屋は警察の張る罟^こをくぐるべく努力する。いたちごっこが、際限なく続いてきた。

同じころ、渋谷のマーケットは、現在でいえば、井の頭線の進行方向左手にかたまっていた。当時の町名でいえば大和田町である。

他のマーケット同様、長屋式で、焼けトタンに葦簀張り、板囲い程度だったのが、このころになると補強され、壁にベニヤ板を張る店もあった。狭い通路を入ると、左右に、さらにこまかい路地が入りこんでいて、さながら迷路である。

靴屋、電気器具屋、ライター屋、中華そば屋、果物屋、乾物屋、何を売るのがわからぬ店、花屋、時計屋、自転車屋などを左右に見ながら入って行った奥に、不景氣스러운靴屋がある。

間口一間半のその店を、カーキ色のオーバーを着た若い男がのぞき込んで、

「社長、いる？」

と声をかけた。

返事はない。

復員軍人めいた若い男は、オーバーの襟を立てながら顔をしかめた。

「おかしいな」と呟ってから、もう一度、「ごめん下さ」と声をかけた。

奥行きも一間半、その奥は小部屋になっている。薄く

色のついた眼鏡をかけた中年の男が顔をのぞかせた。

「あ、いたんですか」

「うるさいな」

中年男は無表情で、

「子供の使いじゃあるまいし、大きな声を出すな」

「わかりにくいところですね」

「早く上れ。ここらの人間は、勘がいいんだから」

若い男は靴を脱ぎ、オーバーのボタンを外した。国民服を改造した背広を着て、ネクタイは締めていない。

「三月に入ったってのに、寒いなんの」

「出酒^でらしただけど、コーヒーがある。勝手に電熱器にかけて、飲んでくれ」

中年男の口調がやや柔らかくなる。

「腐ってもMJBだ。砂糖でも、サッカリンでも、好きなを入れるがいい」

「MJBって何です？」

「コーヒーの銘柄だ。そのくらい知らんと、この商売はできんぞ」

若い男は奥の部屋に入った。二畳ほどだが、床板はしっかりしている。

「おまえ、拳銃を持っているな」

色眼鏡の奥の眼つきが鋭くなった。

「へえ」

「物騒なものを持ち込まんでくれ。間違いであったら、おれが迷惑する」

「社長に迷惑かけるような真似はしませんよ」

「社長はやめてくれないか。橋爪さんでいら」

「はら」

「で、荷物はどこに置いてある？」

橋爪はラッキー・ストライクを一本、唇のはしにひっかけるようにして、きいた。

「店先です」

「どこの？」

「ここです」

「え？」

橋爪は腰を浮かせた。そのまま、店先に出ると、売り物の古鞆類の中に置かれた、とび抜けて大きなポストン・バッグをひったくるように手にした。

「どういうつもりだ？」

「気がつかなかったんですか、いままで」

若い男は、うつむきかげんで笑った。

「冗談ですよ、ほんの……」

「若い奴のやることはわからん」

橋爪は首を横にふって、

「怒る気もしない。冗談ですむことと思うか」

「気を悪くされたのなら、あやまります」

「もう、いら」

橋爪は奥の部屋に入ると、バッグをあけた。白い粉のつまった瓶が何本も入っている。

「品質は絶対だつて、うちの大将が言っていました」

橋爪は答えなかった。瓶のふたを外すと、ふたの裏に付いたのを、指でこすつて、舐め、「うむ」と頷いた。

「横浜のPXから出た品だ。スタンプでわかる」

「橋爪さんのようになりたいですよ」

若い男は、ほっとしたようだった。

「別な場所で堅気の商売をしていて、一日に二、三時間、ここにいるだけで、がっぽり、儲かる。……しかも、サッカー、ズルチンは、三倍に値上りしましたからね」

「その代り、何度も、殺されかけた。身辺が安全になったのは、去年の秋からだ」

「鞆屋つてのが頭がいいと、うちの大将は言うんです。

PXの品物をここに運んで、古鞆の底の下に隠して、さばくわけでしょう。ここの店先から古鞆を持ち去るのは、ごく自然ですからね」

「けっこう、ふつうの客も多いのだよ」

「しかも、サッカー、ズルチンの値が三倍になったの

は、政府がやったことですからね。本当に、強運だなあ」

「こんなことは、そういうまでも続かない」

と橋爪は冷やかに言った。

「甘味料は、いずれ、自由販売になる。次の品物を考えるように、大將に伝えといてくれ」

「次の品物ですか」

青年は橋爪の顔から眼を離さなかった。

「たとえば？……」

「そうさな。……たとえば、ペニシリンとか」

「何ですか、それは？」

「肺炎の特効薬だ。大將は知ってるはずだよ。これなら、あちこちの病院にさばける」

「薬品ですか」

「ああ。ただ、こいつはPXで売ってるものじゃない。

入手は困難だぞ」

「米兵に持ち出させるしか手はないな」

青年はひとりごちた。

「ペニシリンの需要は多いのだ。知り合いの医者によくたのまれるが、現物が無い。これがまとまって手に入ったら一財産だ」

「自分の知ってる米兵で、本牧の病院で働いてる奴がいまいます。そいつにきいてみます」

「この商売も、あと一年とみておいた方がいい」

橋爪は電熱器を指さした。

薬罐が煮えたぎっている。青年は薬罐を持ち上げ、ふちの欠けた湯のみ茶碗に、焦茶色の液体を注いで、

「いい匂いだな」

「あと一年……」

橋爪は呟くように言った。

「二年ぐらいいは続くかも知れないが、うまみがあるの是一年だ。そのうち、煙草も自由販売になるだろう。やがて、アメリカ煙草が放出されるという噂もあるしな」

青年は遠慮がちに、砂糖壺の中の粗目を茶碗に入れ、スプーンでかきまわした。それから、ひとくち飲んで、「うまい」と言った。「砂糖の味がたまらんです。ずっと、無糖コーヒーを飲んでましたから」

「そうか」

橋爪は笑わなかった。

「でも、橋爪さんはいいですよ。どこかに物資のつまった倉庫を持つて噂だし、世田谷辺りの焼け残った邸宅を十軒くらい買ったとか……」

「大げさだな。まあ、二、三軒というところさ」

外が騒がしくなった。

——進駐軍のジープがとまったぞ！

という叫びがきこえた。

「MPですか？」

青年は顔色を萎えた。

「きたか……」

橋爪は笑って、

「気にするな。映画の話でもしてしよう」

「でも……」

「まあ、いい。……クローデット・コルベールの『淑女と拳骨』を観たか？」

「いえ……」

青年は落ちつかぬ様子だった。

「橋爪さんは、映画がお好きなんですか？」

「唯一の趣味さ。……アメリカの女優ではだれが好きだ？」

「イングリッド・バーグマンとグリア・ガースンです」

「バーグマンというと、『カサブランカ』だな」

「ええ。あれは名作ですね」

「ただのメロドラマだ」

橋爪は短く評した。

そのとき、店の前に、白い鉄兜をかぶった数人のMPがあらわれた。

中でも、ひときわ大きな米兵が進み出て、声をかけて

きた。

「ソリー。アイ・キャント・スピーク・イングリッシェ」

と橋爪が答える。

大男は通訳らしい日本人をつれてきた。レイバンのサングラスをかけ、グレイのスプリング・コートに赤いマフラーという、垢抜けた服装である。

「この店は、アメリカの物資を……なんと言うか……そう、隠置しているという密告がありました」

二世じみた、巻き舌の発音だった。

「われわれは、調査する。……もしも、それがここにあつたら、没収しなければなりません……」

「そうですか」

橋爪は平然としていた。

「二世だか、三世だか知らんが、あんたも日本人の血が混っているなら、眼鏡を外して喋ってもらえんかね」

「なんですか？」

「こいつを知らなかったら、ひっかかるところだ」

橋爪は鞆をのせた店先の台の裏側から、男の似顔が印刷された紙をとり出して、

「白系ロシア人をMPに仕立てて、あちこちのマーケットの物資をかつぱらってゆく詐欺の一団が横行しているそうだな。その中心人物の似顔絵が、こっそり配られと

る。……この絵、あんたに似とるようだが」

「逃げろ！」

男が叫ぶと、MPの服装をした外人たちはばらばらと散った。

「動くな」

かっとなった青年がリヴォルヴァーを両手で構えた。

「撃つんじゃない」

その場に釘づけされた男を見て、橋爪は青年を制した。

「おれに貸せ」

リヴォルヴァーを受けとると、橋爪は右手で構えて、

「長島さんよ、あんたたちがくるのは、わかってたんだ

よ」

「ど、どうして、おれの名前を？」

長島と呼ばれた男は、愕然とした。

「戦前の銀座で、長島といえは、最高に頭のづんの良い詐欺師として、噂の男だった……」

と橋爪は言った。

「鈍だまったな、こんな安っぽい詐欺に身を落とすとは。あんたの子分のひとりだが、おれに通報してきたぜ」

「撃たんでくれ」

長島はサングラスを外した。あごの辺りに肉がつき始めていたが、四十前後の、美男と違ってよい顔立ちだった。

「おれには、小さな子供がいる……」

「泥臭い台詞はやめてくれ」

橋爪は冷笑して、

「おれの店の物資のルートをだれにきいた。そいつが知りたい」

「それは……」

「言え、言うんだ」

長島は不意に逃げようとした。

「とまれ！」

橋爪は長島の足元めがけて、拳銃を発射した。

第一章 春の突風

1

渋谷の公園通りときいただけで、かっとなるおとなたちが、世の中には存在するようである。

なぜ、かっとなるのかといえば、その通りにならんだビルや商店に、世界の一流ブランド商品が、これみよがしに、かっ、さらびやかに展示されているからだという。

もっとも、イヴ・サンローランの靴やルイ・ヴィトンのバッグは、東京、いや日本のどこでも売っている。それらは、公園通りにだけあるわけではない。

おとなたちが、かっとなるのは、そこに若い男女が集っているからであるらしい。若い男女どもは、なんともはや、けっついな恰好で、わがもの顔に、坂道を潤歩している。これが許せないのである。

そうした偏狭な考えの持主のひとりである寺尾文彦は、いましも、公園通りの坂を登りつつあった。

(物資が豊富過ぎる……)

寺尾は思わず、呟いた。

(世界の一流品ばかりをウインドウにならべて、どうするんだ。国産品でいいじゃないか。……若い奴らにゼイタクを許さんような法律を作らなけりゃいかん……)

そういう寺尾も、身につけているものは、殆どが輸入物である。

(おれはいいのだ。もう、四十六なのだから……)

この男の二十代は、丸井の商標入りのダスターコートで始まった。グレイのダスターコートは、当時の寺尾にとって最大の贅沢であり、飢餓と就職難が一段落したシンボルでもあった。

(そういえば、あのダスターコートは、どこへ行ったの

だらう?)

ダスターコートを見失ったところ、彼は貧困と縁が切れたのだ。テレビ局に就職し、よく働く一方、六本木や赤坂で遊んだ。そして、丸井のマークのついたダスターコートのことは、いつしか忘れた……

(生れてから飢えたことのない若い連中は、どうも好きになれない。……いや、女の子は別だ。いかんのは男だ。背がひよろつと高いだけで、キャッチボールも、ろくにできない。食うのに不自由しないので、〈優しさ〉などと、軽く、口にする……)

日露戦争生き残りの老人のようなことを呟いている寺尾の特徴は、年齢がよくわからないことである。三十代後半ぐらいにしか見えないのは、色が白く、痩せているからだろうか。おそらくは、水商売の女性だけが、あごの辺りの肉のつき具合から、正確な年齢を推定できるはずである。

寺尾は、コンクリートの壁いっばいに描かれたインドかチベットあたりの風景の色彩画を眺め、次に女性歌手のリサイタルの看板に眼をやった。ホモセクシユアルを題材にした芝居の追加公演の看板も出ていた。

(精神分裂気味の光景だな)

新たに開店するブティックの軒で、無数の赤い風船が

揺れている。となりのピッツェリアの上に、しょつたる鍋の店がある。

(日本中が、こうした雑居文化になってしまった……)

さらに少し歩くと、レコード店のガラス戸で、ロッド・スチュアートのポスターが風にあおられていた。

(軽薄な外人めが……)

寺尾は、自分も、かなり軽薄な服装をしているのに、呟きつづけた。

(なにがロッド・スチュアートだ。同じスチュアートなら、ジェームズ・スチュアートを呼べばいいのに……)

むちゃくちゃである。レコード店から流れ出る軽やかなニューミュージックが彼に追い討ちをかけてきた。

番組の打ち上げパーティーなるものが、なんのために存在するのか、ひとことで答えられるテレビ関係者がいるだろうか?

一つの番組が終る時は、次の番組の準備が始まっているわけだから、プロデューサー、ディレクターは非常に忙しい。タレントやマネージャーたちはさらに忙しい。

この種のパーティーに熱心なのは、広告代理店の人たちである。逆にいえば、これこそは彼らの〈仕事〉なのである。番組進行中は、さして仕事熱心でないかに見受

けられた彼らが、突如、全身全霊をあげてパーティーのために働き始める。

(まあ、顔を出さないわけにはいかないわな、あとのこともあるし。打ち上げパーティーに行かないぐらいで、生意気だてんで、あの局を所^{ところ}払いになつたら、危^{あや}いもん)

と、これは芸能プロのマネージャーの独白。

(そうね。やっぱり、にっこりして、スタッフの皆様ののおかげ、ぐらい言つといいた方が、無難だなあ)

と、これはタレント。

(つまってるんだよな、仕事が。……でも、行かないわけにはいかんぞ。それでなくても、おれ、ここんとこ、不調だったし……)

と放送作家。

(スポンサーに笑顔の一つも見せてやろう。視聴率が、もう一発、派手にいかなかったからな)

とプロデューサー。

かくて、しぶしぶ、というか、ようやく、というか、

とにかく、集つたのが、公園通りの上にある中華料理屋二階のパーティー会場である。

寺尾はわざと遅れて着いたので、プロデューサーの挨拶は終り、スポンサー代表が型通りの謝辞を述べているさいちゅうだった。

——わが社といたしましては、三年でも五年でも続けて頂きたい、すばらしい番組でした。……

スポーツ紙の芸能記者が何人かいた。

「不熱心なディレクターですね」

と若い記者のひとりが寺尾に言った。

「こんなに遅れてくるなんて……」

「いいんだよ」

寺尾は水割りを片手に答える。

「……なぜ、こういうセコい店でやるんだろう？ どういうついでで決つたのか知らないが、『幸福飯店』なんて

名前、きいたことがないよ……」

「打ち上げというと、だいたい、いつも、サンドイッチ

程度か、中華ヴァイキングですね」

と記者が言う。

「たまには、ホテル・オークラの別館を借りきるとかできんのかいな」

寺尾はぼやいた。

「どうですか、次の番組は？ ニュース・ショウですつて？」

「やってるよ、もう」

「よく働きますね、寺尾さんも」

「そのわりに報われない。会社は希望退職者を募ってる

ぐらいだ。なんとかヒットを出さないと……」

「上司に肩を叩かれますか」

「冗談じゃないぞ」

寺尾は笑わなかった。世の中には茶化していいことと悪いことがある。

「働き中毒^{ワクキドク}じゃないですか。休暇をとってサイパンへでも行ったら？」

「いやだよ、わが軍が玉碎した島は。日本の女性が子供を抱えて集団自決をしたんだぜ、あそこで」

「本当ですか」

歴史に疎いらしい若い記者は眼を丸くした。

「本当だとも」

「でも、どこかで発散させないと病気になるですよ」

「なにをしたらしいか、わからないんだ」

「遊びですよ」

「遊びだから、わからないんだよ」

「なんか、ありませんか。ディスコで踊るとか」

「だめだよ」と寺尾は疲れた声を出した。「一度、行ったことがある。若い女の子に、『監獄ロック』のセンスね、って言われたよ。おれはビージーズの『ステイン・アライヴ』を踊ってるつもりなのに、『監獄ロック』。この屈辱が、わかるか」

「どうして、そうむきになるのですか。だから、昭和ひとけたの人は、つき合いくいんだ。『監獄ロック』でいいじゃないか。いちおう、ロックなんだから」

「『監獄ロック』は、失業してた時、毎日きこえてきたから、いやなんだ。昭和三十二年だった……」

「そういう風に深く思い入れしないで下さいよ。なつ、メロ、どこが悪いかと聞き直して……」

「おい、プレスリーは、なつ、メロ、じゃないぞ」
寺尾の声が変わった。

「ベリー・コモならなつ、メロと言われても我慢する。でも、プレスリーはちがうんだ。あれは、現在^{いま}なんだ……」

「わからないなあ、その感覚は……」

「つまりね——一九五〇年代に生れたか生れなかつたぐらしい連中が、五〇年代がなつかしいなんて言うのと、腹が立つんだよ、おれは。日本の五〇年代を考えてみるよ。朝鮮戦争が始まった年から六〇年安保までの苦しい時期だぜ」

「そう、かっかしいで下さいよ」

記者は笑って、

「じゃ、ポギーが生きてた時代だな」

「そのポギーって言い方も、やめてくれないか。背筋がむずむずして仕方がない」